神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	横須賀市蛭畑（ひるばたけ）遺跡出土の人面付土器について
著者	近野正幸
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 38 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2012 年（平成 24 年）3 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

横須賀市蛭畑（ひるばたけ）遺跡出土の人面付土器について

近野（ちかの）正幸

【要旨】

横須賀市小矢部一丁目に所在する蛭畑遺跡から出土した人面付土器は、特異な様態をもつ、稀少な事例として注目されてきた。今回、本資料について改めて資料化を図るとともに、昨今の事例を含め、当該資料の再検討を行った。そこから、本資料を、弥生時代中期後葉における平作川中流域の中核集落を形成していた集団の性格を反映するもの、さらには東日本への文化や墓制の流入に伴う変化に関連して出現したもの、としての位置付けが可能であることを確認した。

【キーワード】蛭畑（ひるばたけ）遺跡　人面付土器　東日本弥生時代

はじめに

神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料である蛭畑[1]（ひるばたけ）遺跡出土の人面付土器（資料名：人面付土器頭部破片、資料番号：ＣＸ〇〇〇五五八三、目録番号：二―一二三―〇一二）[2]については、東日本弥生時代における人面を付した土器の中でも特異な存在であり、昭和四二年（一九六七）に神沢勇一氏が「神奈川県・ひる畑遺跡出土の人面土器」と題する報告[3]（及び実測図・写真）を公にしたことにより、広くその存在が知られるところとなった。なお、本資料は、昭和四一年（一九六六）八月に当時の県立博物館へ収蔵されている。

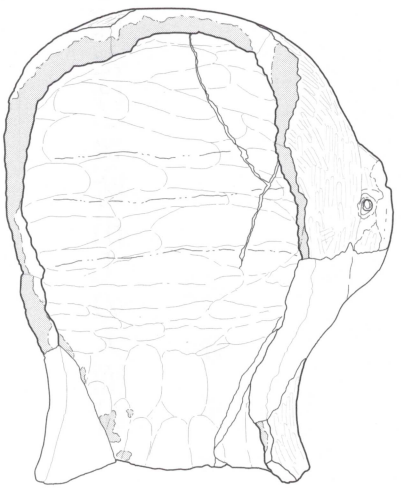
発見の経緯については、先の神沢氏の報文によると「発掘調査による出土品ではなく、かつて同遺跡の一部が削平されたさい、土地の某氏が宮ノ台式土器の破片とともに採集したもので、最近に至って赤星直忠博士の注意を惹くところとなり、八個の断片を接合して復原された。したがって（ママ）に出土状態その他については明らかでない」としており[4]、また赤星直忠氏のメモには「蛭畑山弥生遺跡は県立横須賀高校考古学研究グループにより発見され、横須賀考古学会で一部を発掘しただけで工事により切り崩され、切り崩され中、土器拾いに行った小学生により人面土器断欠（人面部分のみ）が採集され、中学生によりヒスイ曲玉（ママ）が拾われた」とあることから、これが工事中に採集されたものであるため、その出土状態及び本来的様態についても不明確な部分が多いのは否めないところである。

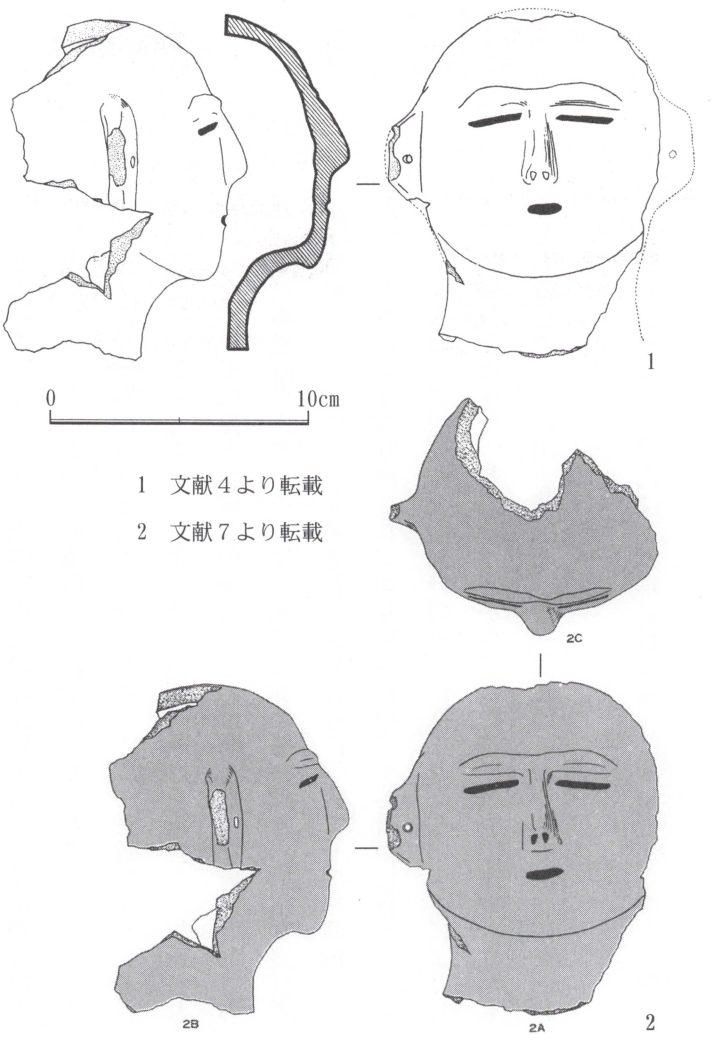
しかしながら、神沢氏による本資料の報告（公表）からすでに四〇

年以上の歳月が経過していることに鑑み、今回改めて資料化を図るとともに、その後に発見された関連資料等も含め、僅かながらでも現状における再評価を行いたいと思う。

なお、人面付土器という呼称は「壺形土器の口縁部に人の顔面像を付した土器」[5]を指すものであり、用語的には人面土器・人面付壺形土器・顔壺・顔面付土器などとも呼ばれているが、ここでは黒沢浩氏による整理[6]に従い、土偶形容器とは区別される、人面の表出・表現が見られる土器のうち、人面の表現が曖昧で土器の器形や文様の中に取り込まれている「顔面付土器」に対し、人面表現の明確なものを「人面付土器」として取り扱うこととする。

また、本稿を纏めるにあたり、池田治さん、井澤純さん、伊丹徹さん、井上久美子さん、竹野喜江さん、田辺可奈さん、山本祐輝さんにお世話になりました。ここにお名前を記して謝意を表します。





1　文献４より転載

2　文献７より転載

図１　蛭畑遺跡出土人面付土器(1) S=1/3

資料（蛭畑遺跡出土人面付土器）の概要

本資料については、これまでに二つの実測図が公表されている。一つは先述した神沢氏の報文中に図示されているもの（図一―一）であり、土器の正面図、側面図（右側面）及び縦方向の断面図からなる。もう一つは、昭和四四年（一九六九）に神沢氏の編集で刊行された『神奈川県考古資料集成一　弥生式土器』において図示されたもの[7]（図一―二）であり、神奈川県立博物館所蔵資料として、再実測（図一―一の修正か）をした正面図（二A）、側面図（二B：右側面）及び平面図（二C：上面図）からなる（赤彩部分は二色刷りによる図示）。蛭畑遺

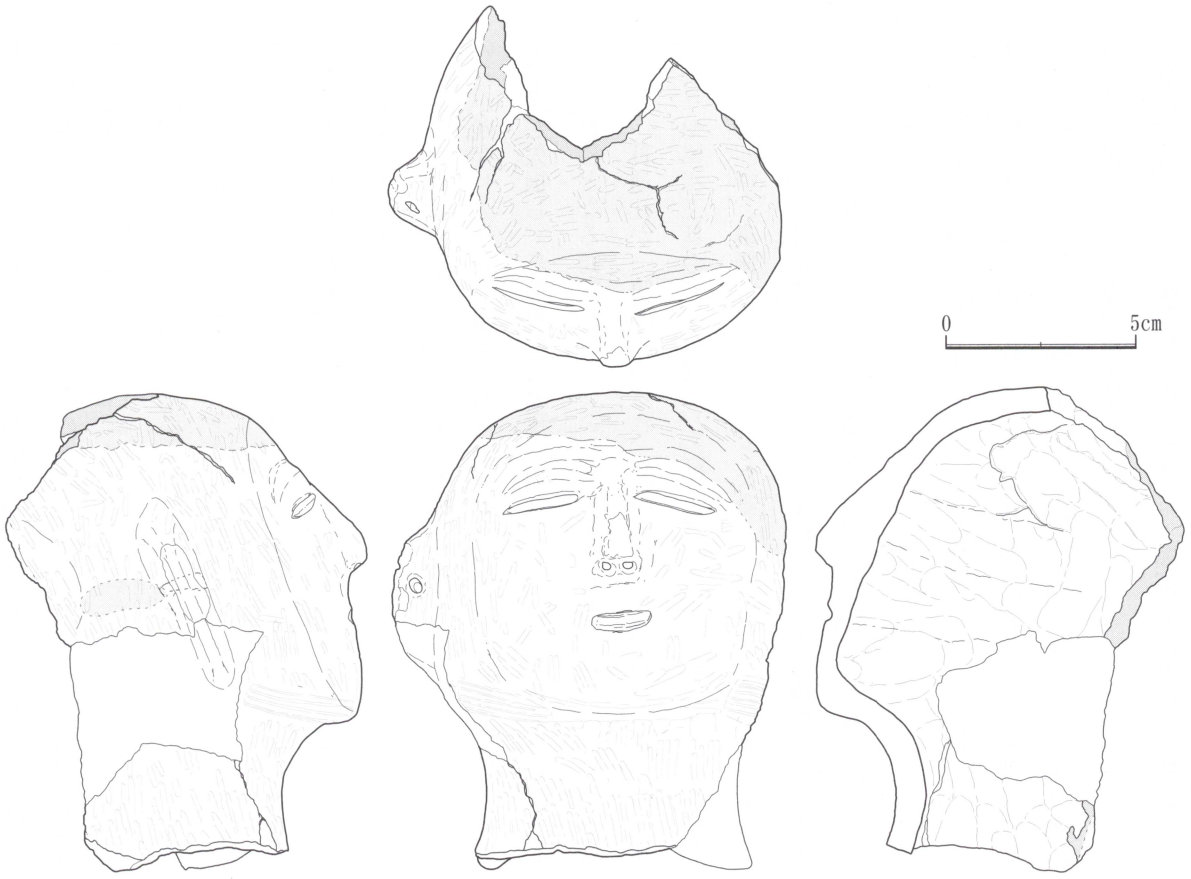


図２　蛭畑遺跡出土人面付土器(2)　S = 1/2

跡出土人面付土器の実測図については、これまで各所で引用されているが、管見に触れた範囲では、一部を除き、いずれも前者の図が使用されており、後者の図を使用したものは僅かとなる。[8] 今回、改めて資料化を行うにあたり、図示したものが図二である。以下、資料の概要並びに所見を記すことにする。

本資料は、八点の破片を接合したものであり、残存しているのは頸部から上位の部分となるが、後頭部（頭頂部～背面部）、右側面の一部（耳の下半部～頸部の一部）及び本来対峙する耳がついていたと思われる左側面を欠損している。このうち、現状では右側面の一部及び頸部左端の欠損部が石膏により復元・彩色されている。先の二つの実測図では顔面部分が真正面を向くように図化されているが、顎付近の水平ライン、そして頸部とそれ以下との接合状態を想定した上で角度等を検討すると、むしろ顔面部分はやや上向きになる形状であった可能性が高いことから、今回図化するに当たっては、顔の角度を調整している。[9] かかる角度で想定した場合、現状での各部の計測値は、高さ約一二・二cm（内、頸部長約三・五cm）、最大幅約一〇・五cm（内、右耳の幅が約一・三cm）、頸部の復元最小径が約六・八cm（頸部下端での復元最大径が約七・六cm）、奥行は最大で約九・五cmとなる。

形状は、総じて立体的且つ写実的であり、顔面表現については耳、目、眉、鼻、口が造作されているほか、頭部に装飾等は見られず、剃髪状をなす。顔の表面と側面及び頭部との境には意識的に稜が作り出され、顔と頸の境も顎の部分を中心に明瞭な稜の存在が認められる。

目と口は、ヘラ状工具による切込みにより造作されていると考えら

れる。目は細く切れ長で、緩やかなハ字状を呈し、両目とも中央から外側に向かって、やや下側からの切込みを入れている。左右ともに長さ、幅の均整がとれている。口は向かってやや右上がりの形状となるものの、向かって左から右へ、下側からの切込みを入れている。また、向かって右側の口角に当たる部分には、径約一～一・五㎜程度の窪みが見られ、造作時に胎土中の小礫が抜け落ちた痕跡とも考えられなくはないが、精製された胎土の状況からすれば、これが切込みに伴い生じた可能性もある。

耳、眉、鼻は、粘土の貼り付けで造作されている。耳は右側上半部のみが残存しており、顔表面の角度と平行する形で貼り付けている。下半部が欠損し、当初の形状を窺い知れないものの、おそらくは上下左右が対称となる鍔状を呈していたと推測される。耳の中央やや上寄りには、貫通孔が一箇所認められ、耳の裏側の孔の周囲に粘土の盛り上がりや棒状工具の先端を使用した押圧痕が見られること、孔の径が表側で約四㎜、裏側で約二・五㎜となることからは、表側より穿孔が行われたものと理解される。[10] また、下半部の欠損を考慮すると、本来は孔が複数存在していた（穿孔されていた）可能性もある。[11] 隆起した眉は緩やかなカーブを描き、外端で下方に向かって先細りし、眉間の部分は隆起が若干低く作り出される。鼻は鼻根から一部欠損している鼻尖（頭）まで直線的に作られ、鼻翼は表現されない。鼻柱付近が口と平行に向かってやや右上がりとなり、[12] 長径約三㎜の二個の鼻孔は、深さ約五㎜で下方から穿孔されている。

顎は突出部分を明瞭に作り出すために、頸部との境に平角棒状の工具による成形（平角棒状工具の隅角による押圧）の痕跡が認められ、側面の顔（頬）と頸の境に見える稜についても、おそらくは意識的に作り出していると思われる。

土器の表面は赤褐色を呈し、全体に赤色塗彩（赤彩）を施している。成形後の器面調整（整形）については、やや粗い刷毛目調整後に、ほぼ全面のミガキを行うものであるが、一部顎の両脇部分において横方向の刷毛目痕が残る。[13] 内面には成形によるナデの痕跡が明瞭であり、頸部については縦方向の顔面～頭部については横方向のナデを行い、部分的には粘土を輪積にした痕跡も認められる。[14] また、頭頂部には、不整ながらも円形に近い欠損部が見られることから、成形の最終段階に粘土板で頭頂部を塞いだ痕跡とも推測される。さらには、内面の右上方に内側から貼り付けたような粘土の重なりが見られ、この部分の成形時に当該箇所の器壁が薄くなってしまったか、もしくは歪んでしまったことによる補修（修正）痕跡とも想定され、僅かに残る右後側頭部の外面が微かに凹んだような痕跡を残していることもまた同様の事象に起因するのではないかとも考えられる。

なお、土器自体の焼成は良好で、胎土も精製された粘土を使った緻密な状態であるが、注目されるのは欠損部の割れ口を含む内外面ともに、かなり高温の二次的な被熱による痕跡を留めていることである。とくに額部～頭頂部にかけて黒ずんだ状態となり、当該箇所には部分的にひび割れ（亀裂）の存在も見られる。ルーペで観察すると割れ口の黒ずんだ部分は、全て発泡した状態となり、赤彩された表面（外面）についても、ほぼ全面にわたって細かい亀裂が認められる。さら

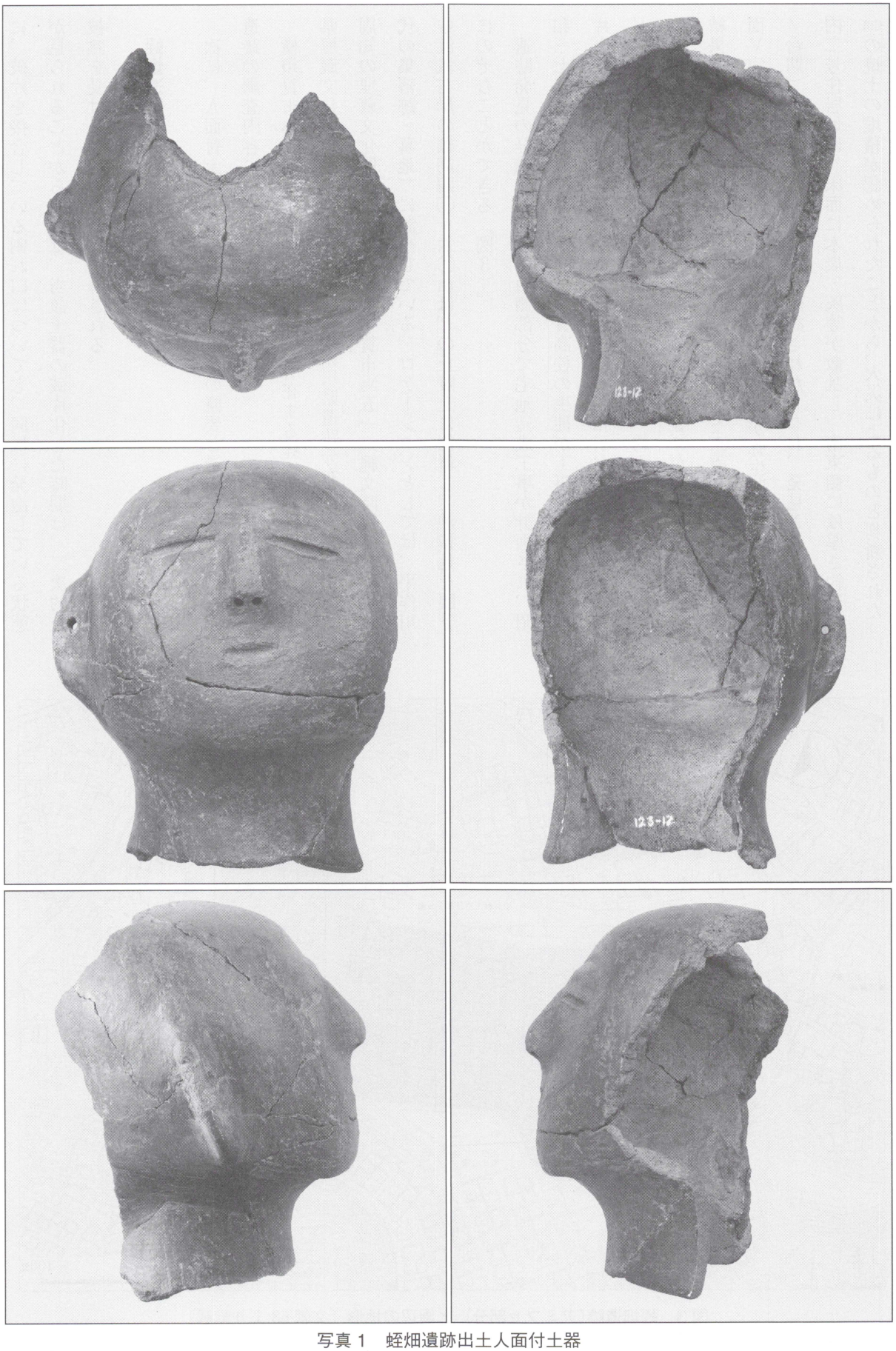


写真１　蛭畑遺跡出土人面付土器

に、破片を接合している割れ口についても、同様に発泡している状態が見られることからすれば、当該土器の破片化した時期は、二次的な被熱を受ける以前のことと理解される。

蛭畑遺跡の概要と既往の調査

次に、人面付土器を出土した蛭畑遺跡の概要と過去に実施された同遺跡の調査内容について概観しておきたい。

横須賀市小矢部一丁目一三七四他に所在する蛭畑遺跡は、『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』並びに『神奈川県遺跡分布地図』によれば、周知の埋蔵文化財包蔵地である横須賀市No.五一（縄文時代及び弥生時代の集落跡・墓地）に該当している。[15] ロケーションとしては、平作川中流域右岸の標高四〇～六〇mほどの丘陵上に位置し、沖積地を眼下にのぞむことができる（図3）。

遺跡発見の経緯は、丘陵の西側部分で宅地造成工事が計画され、昭和三七年（一九六二）に県立横須賀高校の生徒が工事中に多くの土器片とV字状の溝を発見したことに始まる。昭和三七年五月と翌年一二月には、遺物の散布する約二〇〇〇㎡のうち、約六〇〇㎡の範囲を対象に横須賀考古学会による緊急調査（第一次調査）が実施された。[16] その結果、竪穴住居三軒[17]（この内一軒は確認のみで未調査）、溝状遺構（断面V字状）一条を発見し、出土遺物から本遺跡が弥生時代中期後葉（宮ノ台期）の集落跡であることが確認された。なお、発見された遺構の内二号住居址は、床面に木炭・灰等が散乱し、南東側には厚さ約三〇cmの焼土の堆積が認められたことから、火災によるものと判断された。

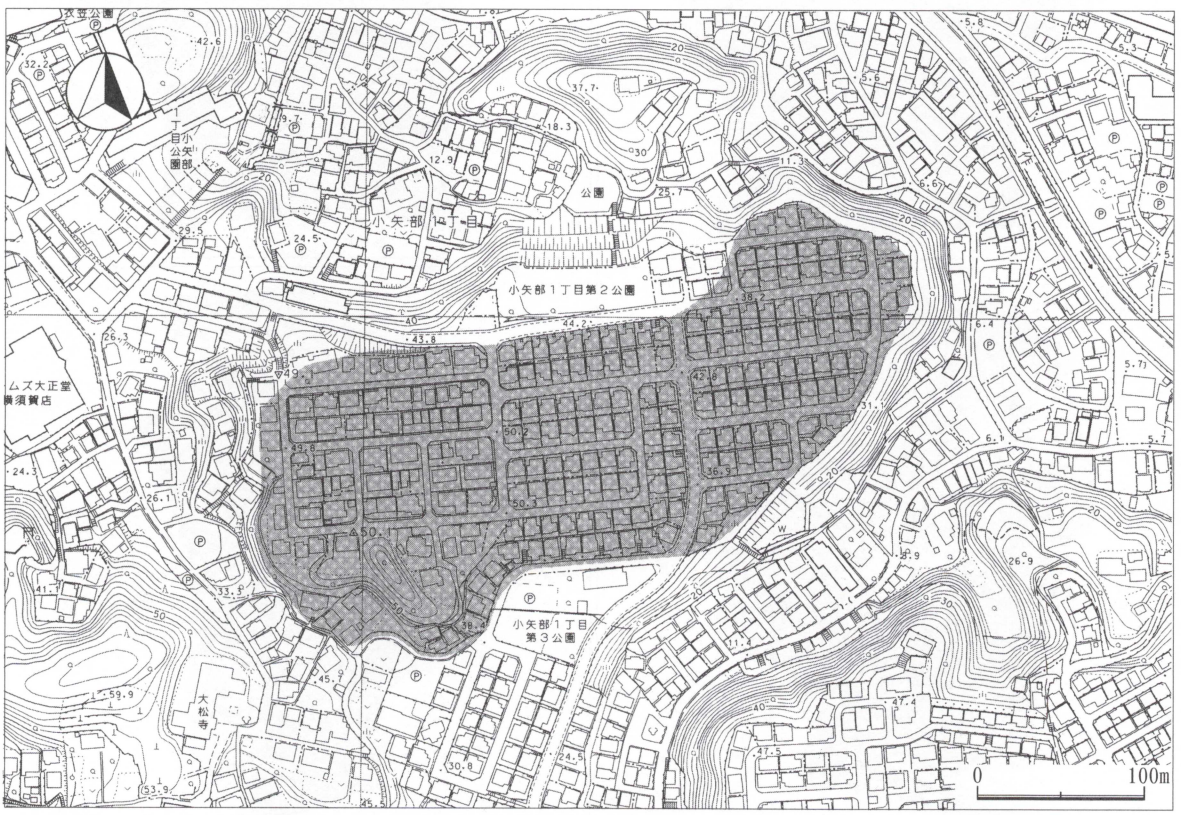


図3　蛭畑遺跡（アミフセ部分）と周辺の地形〔文献63より転載〕

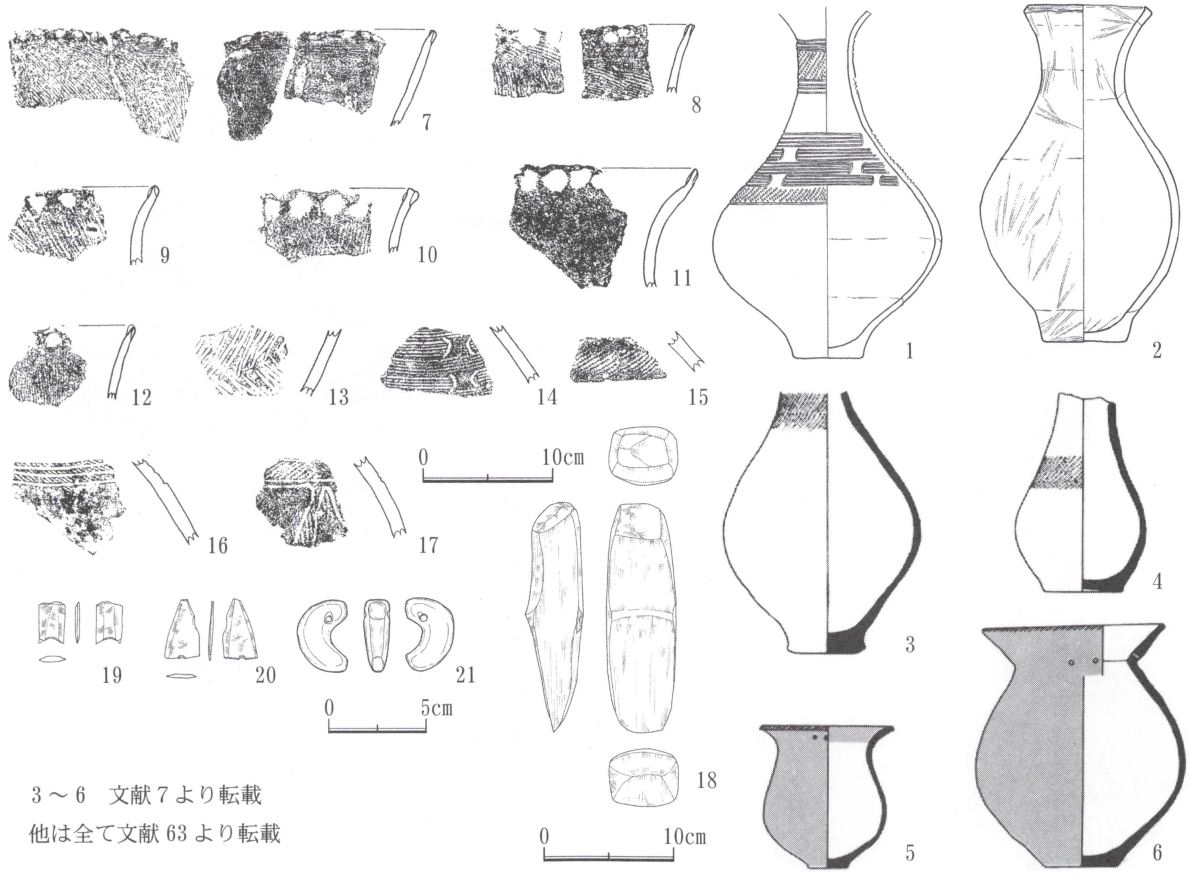


図４　蛭畑遺跡第一次調査出土遺物

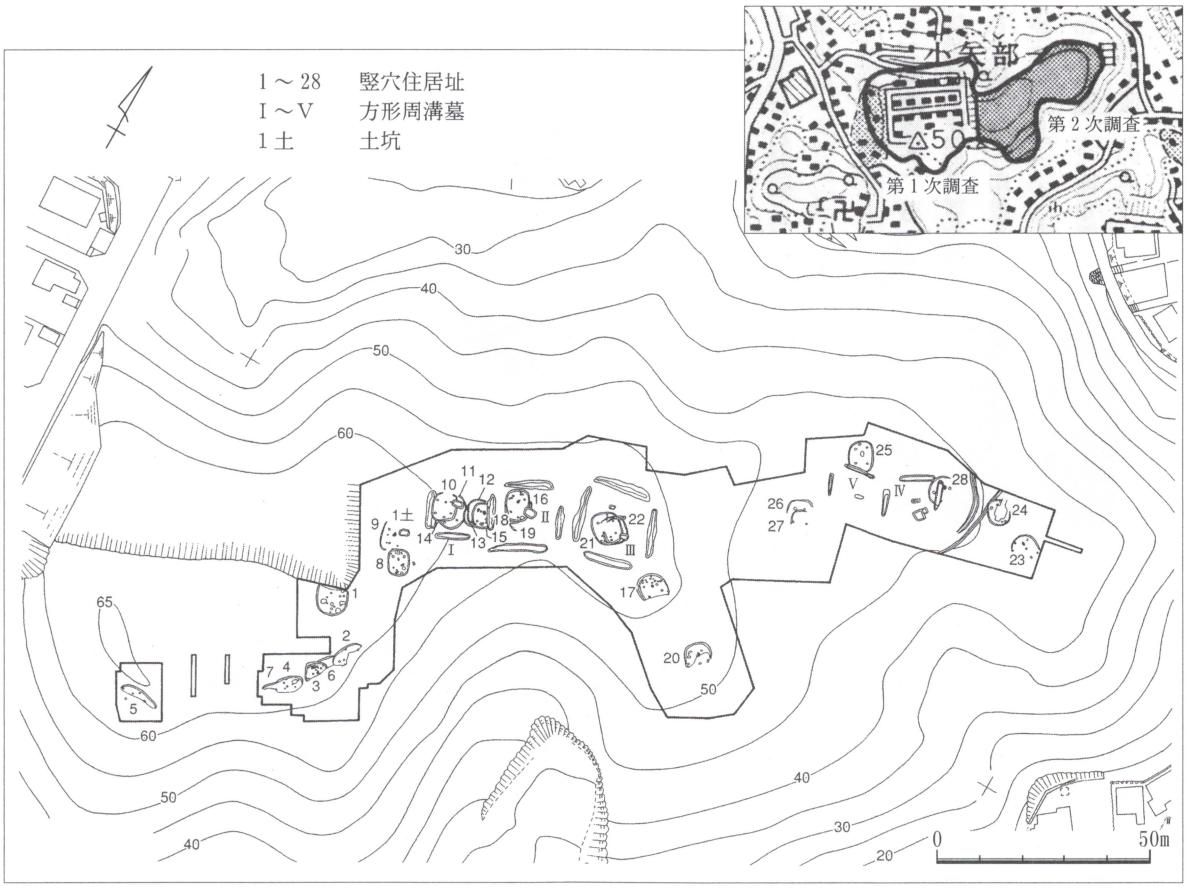
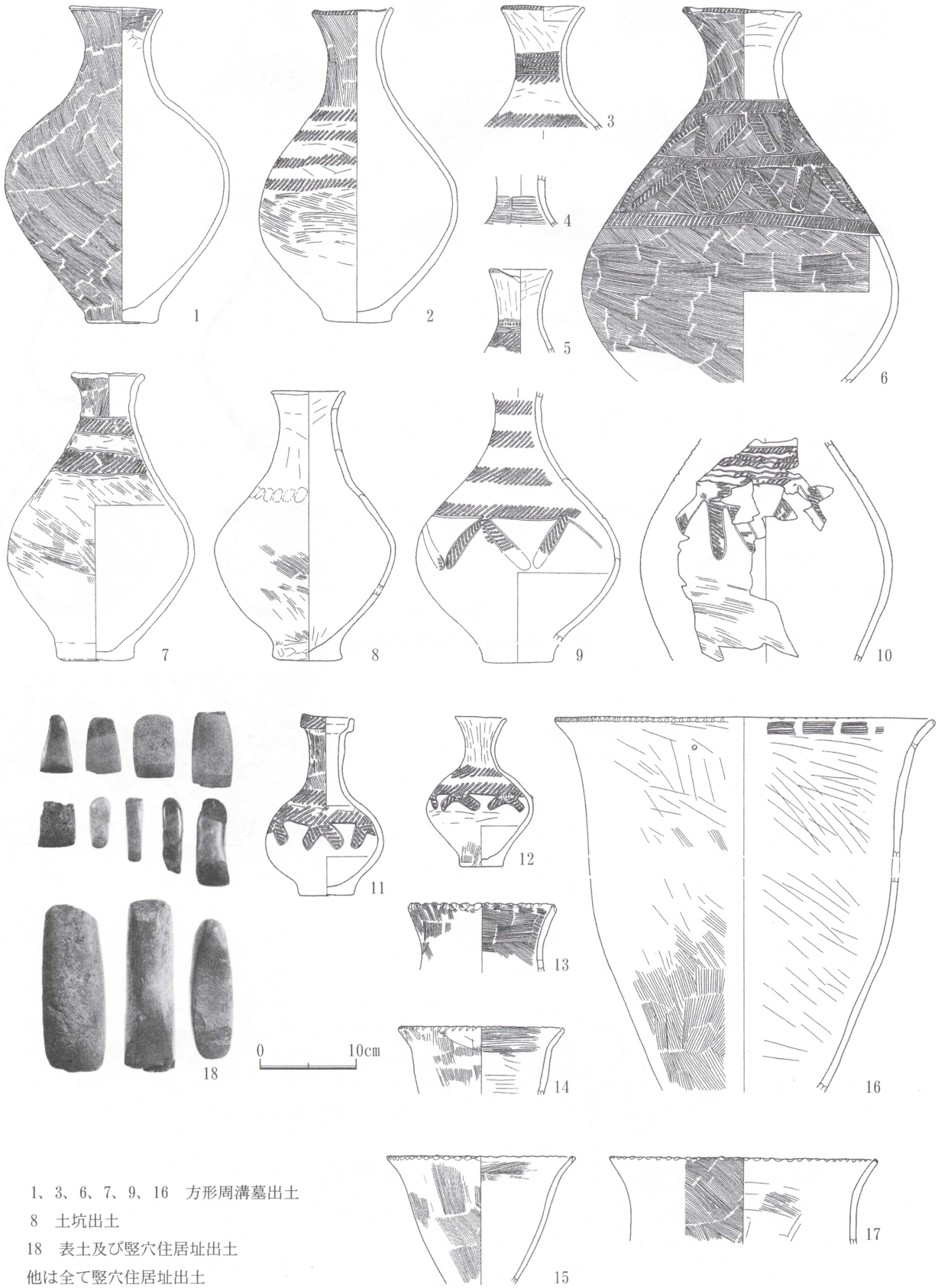


図５　蛭畑遺跡の調査範囲と第二次調査の遺構配置〔文献60より転載、一部改変〕



1、3、6、7、9、16　方形周溝墓出土
8　土坑出土
18　表土及び竪穴住居址出土
他は全て竪穴住居址出土

図６　蛭畑遺跡第二次調査出土遺物〔文献 60 より転載、一部改変〕

しかしながら、十分な調査が行われないまま工事は進められ、多くの遺物が路頭に散乱するところとなった。これら遺物の一部は、付近の住民や児童生徒により採集され、その中に今回報告する人面付土器も含まれていたとされる。[18] 第一次調査で出土した、並びに工事中に採集された遺物については、『新横須賀市史』別編（考古）の記載によると、壺形土器、甕形土器、浅鉢形土器、人面付土器等の土器類のほか、抉入石斧、有孔磨製石鏃、勾玉等の石器・石製品が見られる（図四）。なお、これらの一部は、現在神奈川県立歴史博物館に収蔵されている。[19]

その後、丘陵東部分の開発が計画され、昭和六一年（一九八六）には約六一七〇㎡を対象として、ひる畑遺跡発掘調査団による事前調査（第二次調査）が実施された。[20] その結果、平作川へ向かって張り出す丘陵の上・中・下段において、弥生時代中期後葉（宮ノ台期）の集落（竪穴住居二八軒）と墓地（方形周溝墓五基）、後期前葉（久ヶ原期）の集落（竪穴住居三軒）等が確認された（図五）。出土遺物は、壺形土器、甕形土器、浅鉢形土器の土器類や、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、太形蛤刃石斧、ノミ形石斧、敲石、磨石、台石、砥石などの石器類が見られる（図六）。発見された遺構の内、一辺が約二〇mの方形周溝墓（三号墓）は三浦半島で最大規模を誇り、また出土遺物の示す年代等からは、一時期に一〇軒を超える竪穴住居の存在が想定されている。以上、丘陵西半部の様相が不分明なものの、これまでの調査成果からは、本遺跡が弥生時代中期後葉における長期的、継続型の集落及び墓地で構成された、平作川中流域を中心とする地域の拠点として存在していたものと評価される。

蛭畑遺跡出土人面付土器の類似例

「人面付土器」とは、東日本の弥生時代中期に出現した壺の頸に顔を付けた土器を包括する概念であるが、石川日出志氏は人面付土器を二種類に区別し、顔面付土器や顔壺と呼ばれるものを含めた東日本、特に関東地方に集中して見られるものを「人面付土器A」とし、これらとは表現を異にし、線刻人面土器を含めた西日本的なものを「人面付土器B」とした。[21] 一方、黒沢浩氏は人面付土器と顔面付土器を予め区別した上で、さらに人面付土器を「人面に細沈線などの装飾を施して鯨面とおぼしき表現をとり、また顎に相当するラインに髭（ママ）状の隆帯をつけたりしているもの（人面付土器A）」と「人面に装飾的な文様がなく、鼻筋の通った顔だちのもの（人面付土器B）」の二種に分類している。[22] 蛭畑遺跡出土の人面付土器は、黒沢氏の分類に従えば、「人面付土器B」に区分されるものである。また、本資料以外で現在までに確認された人面付土器Bに含まれる事例は、静岡県静岡市駿河区有東遺跡、長野県佐久市西一本柳遺跡、千葉県市原市三嶋台遺跡（郡本遺跡群三嶋台地区）、神奈川県横浜市鶴見区上台遺跡、群馬県渋川市有馬遺跡、群馬県高崎市小八木志志貝戸遺跡の六例[23]があり、いずれも東日本地域から出土している。以下、各事例について概観する。

静岡県・有東遺跡出土例は、第八次調査で人面付土器が河道から出土している[24]（図七―一・二）。本資料は顔面下半部～左側面にかけての破片で、左耳と鼻が貼り付け、口は切込みにより表現されているようである。耳の中央には貫通孔が一個、鼻孔もあけられている。顎が

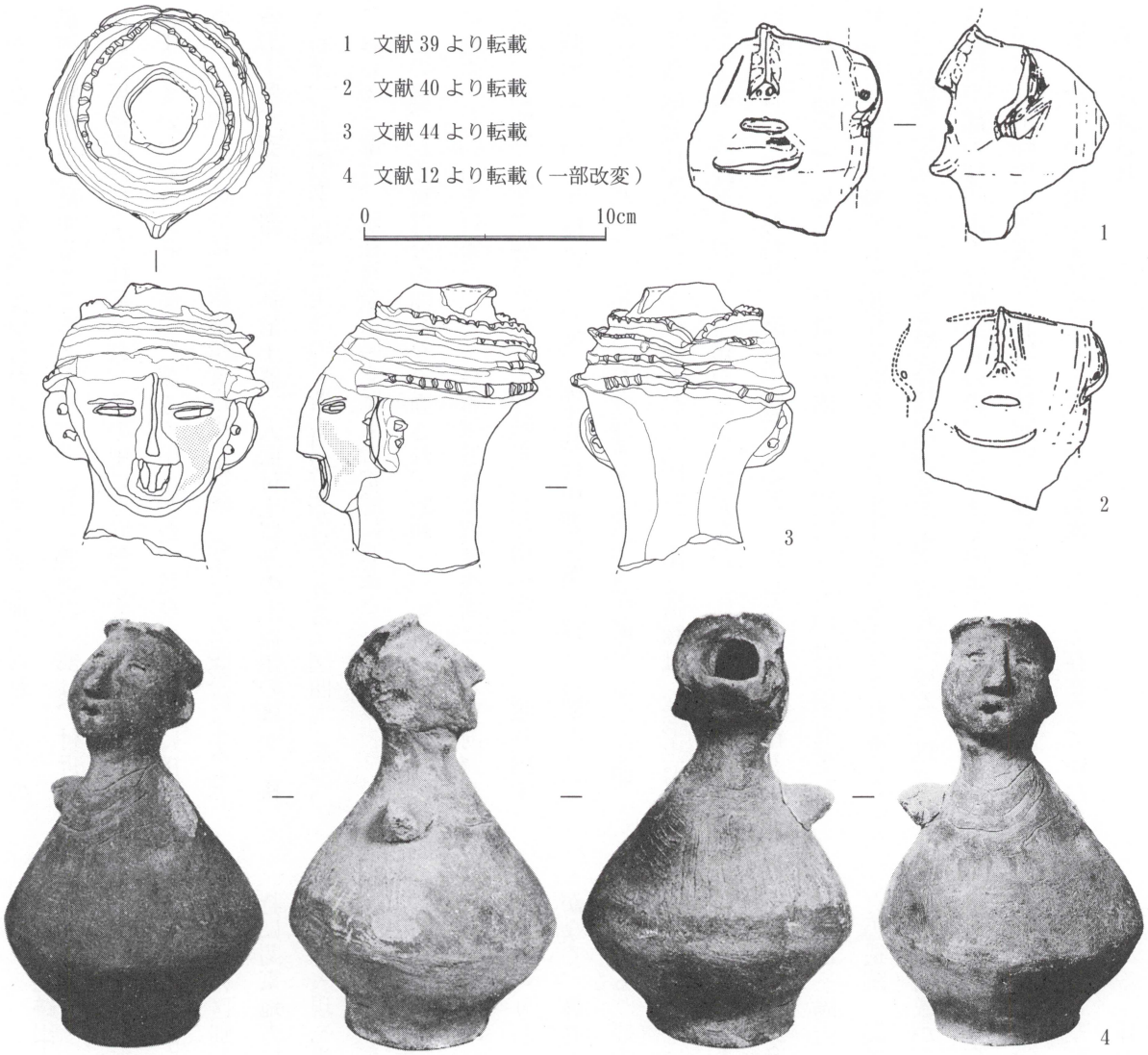


図７　人面付土器Ｂの類例（1）S=1/3

やや突出し、頬には沈線が見られる。左頬上端部に見られる沈線は鼻根の付近から斜め下方へと緩やかに伸びているため、これが目の周囲の二重表現の痕跡とも推測される。本資料の年代は、伴出した土器から弥生時代中期後葉に位置付けられている。

長野県・西一本柳遺跡出土例は、竪穴住居の覆土上面から人面付土器の頭部～頸部にかけての個体が出土している（図七―三）。欠損している頸部より下位は確認されず、残存する範囲での欠損も僅かとなる。報文[25]では現存高が約一二cmとされており、やや細面の頭頂部には径約三cmの口縁部（開口部）が付けられている。耳と鼻は貼り付け、目と口は刳り貫きにより表現されている。両側の耳には二孔ずつ貫通孔があり、鼻孔は認められない。両目の上側には沈線による二重表現を施し、瞼もしくは眉を表現しており、口の穿孔は縦に長い二孔で表現され、歯を表現したものか中央には縦方向の仕切りを残す。頭部には四条の突帯を巡らせ、側頭部から後頭部にかけて部分的に刻み目を入れる。また、左頬から下顎にかけて赤彩の痕跡が認められる。本資料の年代は、伴出した土

図８　人面付土器Ｂの類例(2)　S=1/6

器から弥生時代中期後葉に位置付けられている。

千葉県・三嶋台遺跡出土例は、耕作中の不時発見であるため、蛭畑遺跡例と同様に出土状況や関連遺物の詳細が不明である(26)（図七―四）。本資料は、多量の貝殻とともに発見され、貝層中には人骨や土器片が含まれていたとされる。形状は壺形土器にやや左側に首を傾げたような人面（人頭部）と腕が造形された「人面付土器」となる。他例に比してかなり小型のもので、高さが約一七・九cm、胴部最大径は約一一・四cm、頭部は高さ、幅ともに五cm程度となり、左耳、右腕、左腕の肘から手の部分を欠損する。耳と鼻は貼り付け、目と口は刺突により表現されているようである。耳には一孔の貫通孔があり、鼻孔もあけられている。目の周囲には沈線もしくは凹みによる二重表現がなされ、頭頂部に見られる鍔状の突起は髪形もしくは被り物を表現していると考えられる。また、胸部に当たる壺の胴部上半には複数の沈線による弧状の装飾が見られ、頭頂部には径約一・七cmの不整

円形となる開口部が造作される。[27] なお、眼窩の周辺及び胴部下半には赤彩が見られず、頸部から胸部とした付近の赤彩は垂線を伴う様態を示す。[28] 本資料の年代は、伴出土器及び人面付土器の有する特徴から弥生時代中期後葉に位置付けられている。

神奈川県・上台遺跡出土例は、報文[29]によると楕円形を呈するピット（約一・一×〇・八m）から、部分的に残った木炭とともに出土している（図八―一～三）。高さ約三三cm、口径約一〇cmの壺形土器は、頸部から上位が球状の瓢形を呈し、表面には顔面[30]が付く。眉、耳、鼻は貼り付け、目と口の造作は刳り貫きにより表現される。両耳には各二孔ずつ貫通孔があり、刺突による鼻孔もあけられている。また、人面の頭部と頸部には円形浮文を列状に貼り付け、頭部、頸部、胴部には羽状縄文による帯状の装飾が施される。なお、これらの施文帯を除く外面及び口縁部内面には赤彩が確認される。本資料の年代は、伴出した土器から弥生時代後期前葉に位置付けられている。

群馬県・有馬遺跡出土例は、礫床墓の南側一mの位置より頭部をやや低くして伏せられた状態で出土し、底部破片が北側に位置する礫床墓の周溝からも発見されている（図八―四）。本資料の形状を踏まえ、報文[31]では「人物形土器」と呼称している。高さが約三六・五cm、胴部最大径は約一四cmとなり、頭部には帯状の冠（結髪もしくは髷？）が付く。眉の表現は見られず、頭部の冠及び耳・鼻は貼り付け、目と口は刳り貫きにより表現されている。両側の耳にはそれぞれ二孔ずつ貫通孔が見られ、鼻孔もあけられているほか、唇も表現される。頸部は造作されず、胴部と頭部の境付近においてやや後方に開いた腕を接合しており（左腕は欠損）、腕の先端には三本の指が表現されている。胴部背面は下部を残して欠損し、頭部の一部及び手の部分には赤彩が施される。本資料の年代は、弥生時代後期に位置付けられている。

群馬県・小八木志志貝戸遺跡出土例は、溝、土器棺墓による墓域付近及び土器捨て場から出土した破片が接合している（図八―五）。形状的には群馬県・有馬遺跡例に類似するが、報文[32]では「人面付土器」と呼称している。復元高が約二七・五cm、復元胴部最大径は約一七・五cmとなり、頭部は目の付近で径をしぼっているため、額部分は鍔状にやや張り出した様態を示す。耳と鼻は貼り付け、目と口は刳り貫きにより表現されているが、両目とも上瞼が立体的となる。両耳は部分的に欠失し、現状で一孔ずつ貫通孔が認められる。鼻孔もあけられ、口は下側の一部が辛うじて残っている。頭部下半～胴部にかけての多くは欠損し、頭部と胴部中位に赤彩が認められる。また、有馬遺跡出土例との比較からは、欠損する胴部上半に腕が付いていた可能性も想定される。本資料の年代は、弥生時代後期に位置付けられている。

以上、人面付土器Bの事例は個々の様態差が大きく、時期的には中期後葉に属する四例と後期に属する三例が、現在までに認められる。

蛭畑遺跡出土人面付土器の再検討

蛭畑遺跡出土の人面付土器は、人面表現が写実的であるため、東日本弥生人の顔を模したとされることが多い。[33] 他方、顔面に赤色塗彩が施され、鯨面表現も見られない点では、東日本弥生時代の人面付土器の中でも特異な存在として位置付けられてきた。当該地域の同時代に

おける人面付土器（顔面付土器）は、鯨面装飾を持ち、弥生時代中期前葉から中期中葉にかけて主体的に認められるが、蛭畑遺跡出土例を含む中期後葉から後期に属する事例は然程多く見られるものではない。そのため、資料の僅少さは否めないものの、ここでは先に概観した類似例との比較を通じて、若干ではあるが本資料について検討を行いたい。

蛭畑遺跡出土例と人面表現及びその造作等で近似するものとしては、帰属時期をほぼ同じくする千葉県・三嶋台遺跡出土例及び静岡県・有東遺跡出土例が挙げられるが、先に挙げた六例中、破片のため顔面の様態が一部しか判明しない有東遺跡出土例を除けば、いずれも頭部に装飾乃至造形が見られ、蛭畑遺跡出土例のような剃髪状のものは認められない。また、蛭畑遺跡出土例に見る人面表現のうち、装飾的な施文部分以外の目、鼻、口、耳といった個別部位の形状などは、黒沢氏の分類で言う「人面付土器A」に該当する栃木県栃木市大塚古墳群内遺跡SK一一六出土の人面付土器[34]（図九）に比較的近似している。当該例は土坑墓からの出土であり、竪穴住居より発見された長野県・西一本柳遺跡出土例と同様、頭頂部の開口した頭部～頸部の個体となる。年代は伴出した土器から弥生時代中期後葉に位置付けられている。

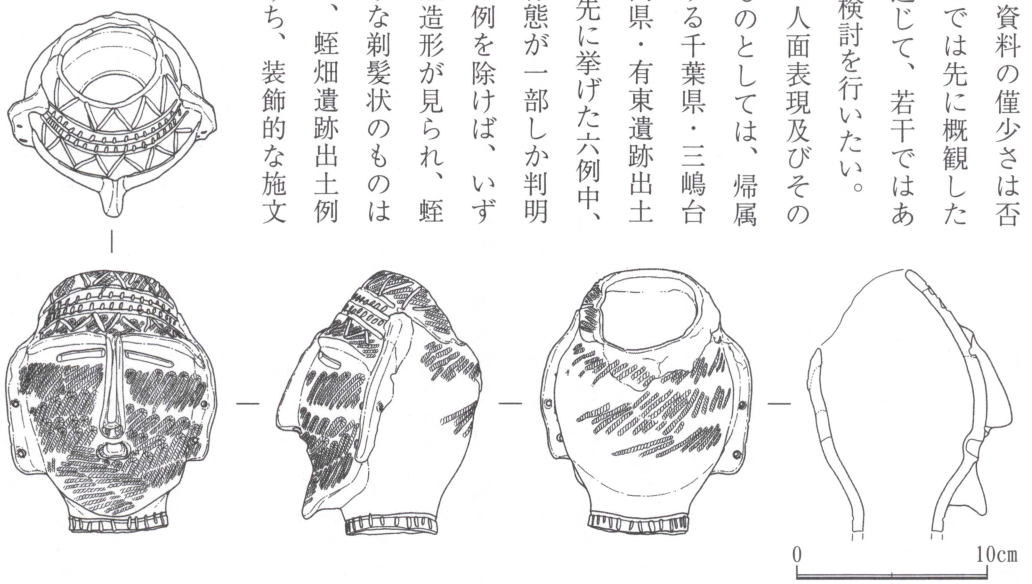


図９　栃木県・大塚古墳群内遺跡 SK-16 出土の人面付土器A　S=1/4　〔文献 53 より転載〕

蛭畑遺跡出土例の本来的様態について、欠損する頸部より下位の形状を復元するに際しては、三嶋台遺跡出土例及び上台遺跡出土例の形状が非常に示唆的である。前者のように腕が付くか否かは別としても、頸部より下位は両例と同様に壺形土器の形状を呈していたと推測される（図一〇）。さらに、同じ中期後葉に属する三嶋台遺跡出土例、西一本柳遺跡出土例、大塚古墳群内遺跡出土例との対比からは、人面表現とは異なる機能的造作という点において、頭頂部付近に開口部が存在したであろうことを想定できる。[35]現状における蛭畑遺跡出土例の残存状況（痕跡等）からは、その積極的な証左を得られないものの、おそらくは後頭部もしくは頭頂部の後方寄りの部分に開口部が存在したと考えたい。[36]

次に、蛭畑遺跡出土人面付土器の使用形態及び性格については、既に神沢氏の

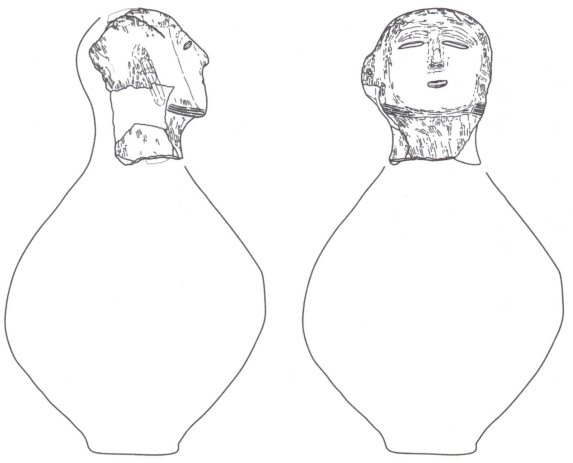


図 10　蛭畑遺跡出土人面付土器の想定復元

報文以来、内容は不明瞭な部分が多いながらも、集落から出土するという事実に照らし、弥生時代中期後葉以前の、再葬墓と関連する人面付土器等とは区別して考えられてきた[37]。蛭畑遺跡出土例の使用形態について神沢氏は、第一次調査で発見された火災の痕跡を留める竪穴住居の存在から、日常の使用を想定し難いこの種の土器を「なんらかの理由で墓壙(ママ)外―おそらくは住居内―に置かれていた時に火災を蒙った」として想定したが、蛭畑遺跡出土例では土器の割れ口部分においても二次的な被熱による発泡の痕跡を認め得ることからすれば、被熱時には既に破片化していたことが知れる。さらには有東遺跡出土例、西一本柳遺跡出土例、大塚古墳群内遺跡出土例を含め、同一個体となる他の部位の破片が発見されないという状況を鑑みた時に、これが人面付土器という特別な土器を使用する何らかの行為に伴い、意図的に破損もしくは破砕した結果とも推測されるのである。この意図的に土器を破損する行為自体は、後期に属する類似例の中にもその存在を認めることができ[38]、人面付土器Bの出土状態からは、使用される場所も多様であり、埋葬や住居の廃絶等に伴う非日常的な行為に使用されたとも思料される。また、その一部は遺棄後の時間の経過とともに、本来使用された場所とは異なる位置へ移動、流出した状態を留めているとも考えられる[39]。なお、蛭畑遺跡出土例は採集品のため、出土状態に基づく検討は困難であるが、第二次調査において確認された方形周溝墓の存在からは、使用された場所が必ずしも竪穴住居に限定されるものではなく、一方で平作川中流域の中核集落において発見されたという事実は、その稀少性とともに当該地で集落・墓地を形成していた集団の性格を反映しているものと判断される。

おわりに

今回、蛭畑遺跡出土の人面付土器について改めて資料化を行い、近年における類似例及び関連資料の増加を踏まえた若干の検討を試みたが、最後に本資料を含む人面付土器Bの出現と系譜の背景を巡る昨今の研究状況について簡単に触れておきたい。

東日本における人面の表出・表現が見られる土器については、弥生時代再葬墓研究の進展により、弥生時代中期前葉～中葉の時期を主体に（一部は後葉まで）展開した土偶形容器（容器形土偶）・人面付土器A・顔面付土器等の衰退後に、これらとは様態、すなわち系譜を異にする人面付土器Bが登場してくるという構図が明らかにされてきており[40]、この変化自体は弥生時代中期中葉頃を境に壺再葬墓から方形周溝墓へと替わる東日本の同時代墓制の変容に関連した動きとして理解されている[41]。また、東日本地域の壺再葬墓制の特徴の一つである人面付土器が、方形周溝墓という新たな墓制を採用した後も一部で製作・使用され続けている状況については、新しい文化（農耕文化）や墓制の流入による変化の中で、旧来のスタイルを変質させながらも継承していたという説明がなされている[42]。

蛭畑遺跡出土の人面付土器は、採集資料であるため、出土状態及び具体の使用形態については明らかにし得ないものの、その様態さらには方形周溝墓を伴う集落遺跡から出土したという点で、本来的にはかかる変化に伴う一様相を示す事例として位置付けられるものと言えよう。

註

(1) 本遺跡の名称については、「ひる畑遺跡」と表記しているものも数多く認められるが、ここでは『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』等の記載に倣い、「蛭畑遺跡」として表記を統一する。また、「蛭畑」のよみについては文献21及び文献32に準拠し、「ひるばたけ」とした。

(2) 文献15による。

(3) 文献4による。なお、報文とともに「第一図版」として巻頭にモノクロの展開写真が掲載されている。

(4) 神奈川県埋蔵文化財センター所蔵『赤星ノート』(横須賀市No.四六四)による。なお、同資料には昭和六一年(一九八六)当時の蛭畑山東半部の現況写真も添付されている。

(5) 文献25による。

(6) 文献48による。

(7) 文献7の「図版一二―二 横須賀市 ひる畑 (Hirubatake)」による。なお、当該図版のスケールバーが縮尺1/4となっているのは、1/2の誤りである。

(8) 文献43及び文献55では、文献7に掲載された図を使用している。

(9) 角度的には、文献4の巻頭図版にある「側面」の写真に近いと想定される。また、今回角度を修正したために、各部の計測値も自ずと異なっている。

(10) 文献4では、「穿孔は焼成前に両側からおこなわれており」としているが、現状で両側からの穿孔の痕跡については確認できない。

(11) 橋本裕行氏は、文献49で全国の弥生時代に属する顔表現を持つ資料を集成・提示する中で、「多くの資料の鼻と耳には小孔がある。(中略)耳には一孔・二孔・三孔のものがある」とする。

(12) 当該資料を見て、「やや首を傾げる」といった印象を受けるのは、口と鼻柱付近がやや右上がりとなることに起因するものと考えられる。

(13) ミガキ調整自体は、かなり丁寧に行われていることからすれば、この部分にのみ刷毛目痕が残ることにかえって不自然さを感じる。そのため、そこに何らかの装飾的意図があったとも考えられなくはない。

(14) その他、頸部下端や口と顎の間に見られる水平方向の割れ口等についても輪積みの痕跡として判断される。

(15) 文献17では、横須賀市単独の遺跡番号として「衣笠七」を並記している。

(16) 文献3・5・6・16・62・63による。

(17) 文献4では「宮ノ台期の単純遺跡で、発掘調査ならびに宅地造成工事のさいの所見から、十個以上の竪穴住居址の存在が知られている」とある。

(18) 文献63(写真六四―一は、左右が反転している)及び神奈川県埋蔵文化財センター所蔵『赤星ノート』(横須賀市No.三四五)による。なお、『赤星ノート』には、蛭畑遺跡の採集品(硬玉製勾玉・壺形土器・人面付土器)の写真が添付されている。

(19) 蛭畑遺跡出土資料の収蔵品としては、人面付土器のほか、壺形土器四点(内二点は広口)、柱状片刃石斧・太形蛤刃石斧・ノミ形石斧各一点、無孔石包丁(石包丁状石器)二点、敲石四点、石皿類似(盤状)石器、軽石製異形石器・硬玉製勾玉各一点となる(文献15)。また、出土遺物のうち一部の実測図が文献1・7・63に掲載されている。

(20) 文献27・29・60・63による。

(21) 文献26による。

(22) この分類(細分)を黒沢氏は「石川日出志氏のもの(文献26)と同じ」としているが、実際には石川氏の「人面付土器A」を「人面付土器」と「顔面付土器」に区別し、さらに「人面付土器」をA・Bに細分したものが黒沢氏の分類となる(文献48)。なお、設楽博己氏が「顔面付土器」、「顔壺」と呼んでいるものは、黒沢氏の分類による「人面付土器A」に該当するものである(文献64)。

(23) 有東遺跡では第四次調査においても、河道より人面付土器の破片一点が出土しているとされる(文献38・39)が、実測図・写真等を含め資料内容の詳細が不明(未公表)であるため、ここでは類似例に含めていない。

(24) 文献39・40による。

(25) 文献44による。

(26) 文献12・42・59による。なお、文献12の口絵一・二の写真とも左右が反転している(図七―四は反転を修正したもの)。実測図は未公表。

(27) 市原市指定文化財の指定に係る説明資料では、「人面背面の開口部」としているが、写真で見る限り、頭頂部のやや左下寄りの位置に開口部が存在しているようである。また、開口部の周囲が僅かに盛り上がり、右下には粘土紐の合わせ目のような痕跡(切れ目)が認められる。

(28) 赤彩は、胸部に当たる部分の沈線と平行して弧状を呈するものと、そこから下方に垂れるものが見られ、これが装飾品もしくは文身の表現であるとも推測される。

(29) 文献2による。なお、異なる実測図が文献1・7・9に掲載されている。

(30) 神奈川県指定文化財の指定に係る説明資料では、各部の計測値を「器高三一・七cm、人面部幅一二・九cm、胴部最大幅一九・四cm、底径七・四cm」としている。また、文献58では、計測値が「口径一二cm、高三二cm」としているほか、出土状況についても、文献2の記載に見られない「地下一メートル、黒色土とローム土の境い目から顔面を下に向けた状態で出土し鼻と左耳はとれていた」との記載がある。

(31) 文献35による。

(32) 文献52による。

(33) 文献11・18・19・23・24・37など。また、写実的な人物表現からは時代を超えた人物埴輪と対比されることも多いが、これが感性による比較でしかないことは言をまたない。

(34) 文献53による。

(35) 本資料における開口部の存在は、先にふれた頭部内面右上方にある、粘土の重なりの表面に見える指押さえの痕跡や頭頂部付近における内面の成形状態からも想定される。

(36) 人面付土器Bに見られる開口部自体は、中期中葉まで主体となっていた人面付土器類から継承された特徴の一つとして認識されるが、使用形態自体が異なる前提を有する中で、これが単なる形状模倣であった可能性もある。なお、後期に属する人面付土器Bのうち、有馬遺跡出土例及び小八木志志貝戸遺跡出土例の頭頂部には開口部の存在を確認できず、この二例が他の人面付土器Bと比べて「人物形土器」とも呼称することの可能な様態を示すことから、本来的には開口部が存在しなかったか、もしくは欠損部としている接合破片の無い箇所（例えば背面など）に開口部が存在していたとも考えられる。

(37) 文献9・22・41・47ではその性格について、東日本における他の人面土器の事例と同様に、「葬礼用の土器」、「死者用に特別につくられた壺」、「骨を入れていた容器」、「遺骸を葬るさいの骨壺」として考えている。

(38) 有馬遺跡出土例、小八木志志貝戸遺跡出土例は、その出土状態及び復元された状況からすれば、意図的な破損（砕）行為の存在が推測される。また、上台遺跡出土例も、頸部の位置で頭部と胴部に破損しており、さらには文献58の出土状況に関する記述に従えば、やはり意図的な破損というものを想定することも可能である。

(39) 河道から発見された有東遺跡出土例には摩耗痕跡が見られず、且つ同一個体となる他の部位が発見されていないこと、小八木志志貝戸遺跡出土例は、墓域付近や溝底から出土した破片が接合していることからすれば、何らかの行為に伴って破砕されたものが、その後に川や溝へと流出した可能性も指摘できる。

(40) 文献48による。なお、黒沢氏は東日本で人面付土器Bが成立する要因として、西日本における人面表現の土製品との関係性を想定している。

(41) 石川日出志「第Ⅱ章第四節四　東日本弥生墓制の特質」（文献51）及び文献65による。

(42) 設楽博己「第Ⅱ章第三節五　土偶の末裔」（文献51）及び文献50による。なお、文献51の「三三七　ひる畑遺跡出土人面付土器」の写真は、左右が反転している。

引用・参考文献

(1) 小林行雄・杉原荘介編（日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会）一九六一『弥生式土器集成　本編』第二、弥生式土器集成刊行会

(2) 坂詰秀一・関　俊彦　一九六二「弥生後期の人面土器について」『考古学雑誌』第四八巻第一号、日本考古学会

(3) 神沢勇一　一九六四「横須賀市・ひる畑遺跡調査略報」『横須賀考古学会年報』九（謄写版）、横須賀考古学会

(4) 神沢勇一　一九六七「神奈川県・ひる畑遺跡出土の人面土器」（A Clay Figure of Yayoi Age descovered at Hirubatake, kanagawa Pref.）『考古学集刊』第三巻第三号、東京考古学会

(5) 神沢勇一　一九六八「神奈川県横須賀市ひる畑遺跡」『日本考古学年報』一六（昭和三八年度版）、日本考古学協会

(6) 横須賀考古学会（橋本良雄）　一九六九「主要遺跡の解説　二七、蛭畑遺

跡」『かながわ文化財』第五七・五八合併号（特集　三浦半島の古代文化展）神奈川県文化財協会
(7) 神奈川県立博物館　一九六九『神奈川県考古資料集成一　弥生式土器』
(8) 神奈川県立博物館　一九六九「人面土器」『県下の先史時代土器展（土器と生活）特別展リーフレット、「特別展・県下の先史時代土器展について」『神奈川県立博物館だより』Vol.1 No.9
(9) 神奈川県立博物館　一九七四「人面土器」『考古　神奈川県立博物館展示解説シリーズ七』
(10) 神澤勇一（ママ）　一九七五「器形と用途（顔面付土器のいろいろ）」『弥生式土器』ブック・オブ・ブックス 日本の美術●四四、小学館
(11) 佐原　眞他　一九七五「図版三二　東日本の弥生人の顔（人面土器の頭部）」『古代史発掘四　稲作の始まり』講談社
(12) 須田　勉　一九七六「口絵　人面土器解説」『古代』第五九・六〇合併号、早稲田大学考古学会
(13) 柴田俊影　一九七六「人面付土器の意義」『考古学研究』第二三巻第二号、考古学研究会
(14) 神澤勇一（ママ）他　一九七八「口絵　人面付土器の一部」『日本史の謎と発見一　日本人の先祖』毎日新聞社
(15) 神奈川県立博物館　一九七九『神奈川県立博物館人文部門資料目録（二）考古資料目録』
(16) 赤星直忠　一九七九「八〇　ひる畑遺跡」『神奈川県史』資料編二〇（考古資料）
(17) 横須賀市教育委員会　一九七九『横須賀市埋蔵文化財分布地図・地名表』
(18) 森　浩一　一九七九「日本的生活の芽生え（髪形と入れ墨）」『図説日本文化の歴史』一（先史・原史）小学館
(19) 工楽善通　一九七九「墓への祈り」『日本の原始美術三　弥生土器』講談社
(20) 坪井清足　一九八〇「土器・土偶・埴輪（土器にみる人体の表現）」『原始・古代の美術　土器と埴輪』日本美術全集第一巻、学習研究社
(21) 角川日本地名大辞典編纂委員会編　一九八四『角川日本地名大辞典』一四（神奈川）角川書店
(22) 森　浩一他　一九八五「口絵　弥生人の顔（人面形土器）」『日本の古代一　倭人の登場』中央公論社
(23) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　一九八六「弥生人」『特別展　弥生人の四季』
(24) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　一九八七「弥生人」『シンポジウム弥生人の四季』六興出版
(25) 石川日出志　一九八七「二二　土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』第八巻（祭と墓と装い）雄山閣
(26) 石川日出志　一九八七「人面付土器」『季刊　考古学』第一九号（特集・弥生土器は語る）雄山閣
(27) 浅川利一・河合英夫　一九八七「一三　横須賀市・ひる畑遺跡の調査」『第一一回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』第一一回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
(28) 佐原　眞　一九八七「農耕文化の熟成」『世界考古学大系』日本補遺編、天山舎
(29) 河合英夫　一九八八「三七　ひる畑」『第九回三県シンポジウム　東日本の弥生墓制―再葬墓と方形周溝墓―』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会
(30) 中村　勉　一九八八「蛭畑遺跡出土の人面土器（コラム）」『横須賀市史』上、横須賀市
(31) 十菱駿武　一九八八「遺跡・博物館探訪　神奈川県（人の顔がついた壺）」『図説検証原像日本　①人間と生業　列島の遠き祖先たち』旺文社
(32) 横須賀市都市整備部都市整備課編　一九八九『横須賀の町名一九八九』横須賀市
(33) 森　浩一　一九八九「さまざまな弥生人の顔」『図説日本の古代三　コメと金属の時代（縄文時代晩期～弥生時代）』中央公論社
(34) 岩永省三　一九八九「弥生人の装い」『古代史復元五　弥生人の造形』講談社
(35) 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　一九九〇『有馬遺跡Ⅱ』弥生・古墳時代編、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第一〇二集
(36) 神奈川県教育委員会編　一九九〇「四―（三）弥生時代の墓　横須賀市ひる畑遺跡」『神奈川の遺跡―先土器から小田原城まで―』有隣堂
(37) 大阪府立弥生文化博物館編　一九九一「ひがしの顔」『弥生文化　日本文

化の源流をさぐる』平凡社
(38) 伊藤寿夫　一九九一「静岡市有東遺跡における弥生時代集落の検討」『静岡市立登呂博物館館報』二―平成三年度― 静岡市立登呂博物館
(39) 伊藤寿夫　一九九二「一、川で区画された弥生時代の集落 ―有東遺跡第八次・第一〇次調査―」『平成四年度埋蔵文化財発掘調査報告会「静岡の原像をさぐる」』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
(40) 静岡市教育委員会　一九九二「有東遺跡（第八次）」『静岡市の埋蔵文化財』平成二年度発掘調査の概要
(41) 中村　勉　一九九二「葬る」『赤坂遺跡にみる遠い祖先のくらし』三浦市埋蔵文化財調査報告書第二集、三浦市教育委員会
(42) 田中新史　一九九二「三嶋台の弥生人」『土筆』第二号、土筆舎
(43) 埼玉県立博物館　一九九四『特別展　検証！関東の弥生文化 ―一粒の米が変えたくらし―』
(44) 長野県教育委員会・長野県土地開発公社・佐久市教育委員会　一九九四『西一本柳遺跡Ⅰ』佐久市埋蔵文化財調査報告書第三四集
(45) 神奈川県立歴史博物館　一九九五「人面土器」『神奈川県立歴史博物館展示解説書』
(46) 神奈川県立埋蔵文化財センター　一九九五「土製品」『かながわの弥生文化』かながわの遺跡展展示図録
(47) 神奈川県立歴史博物館　一九九六「人面土器」『神奈川県立歴史博物館総合案内』
(48) 黒沢　浩　一九九七「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』No.四一六（特集　弥生時代の顔）ニュー・サイエンス社
(49) 橋本裕行　一九九七「弥生人の顔 ―弥生時代の考古資料に表れた顔について―」『考古学ジャーナル』No.四一六（特集　弥生時代の顔）ニュー・サイエンス社
(50) 設楽博己　一九九八「顔からみる弥生びとの精神」『第三回特別展　顔・かお・KAO ―異様な形相は魔除けの願い―』かみつけの里博物館
(51) 国立歴史民俗博物館　一九九九『新 弥生紀行 ―北の森から南の海へ―』朝日新聞社
(52) 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　一九九九『小八木志志貝戸遺跡群一（小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡・菅谷石塚遺跡）』Ⅰ　弥生時代編、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第二五六集
(53) 栃木県教育委員会・財団法人とちぎ生涯学習文化財団　二〇〇一『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第二四四集
(54) 財団法人かながわ考古学財団・秦野市立桜土手古墳展示館　二〇〇一「人面土器」『発掘されたかながわの顔』巡回展二〇〇一展示図録
(55) 大島慎一　二〇〇一「かながわの弥生人面土器について」『かながわの原始の顔・古代の顔』公開セミナー発表要旨、財団法人かながわ考古学財団
(56) 伊丹　徹　二〇〇一『弥生時代の顔』巡回展二〇〇一（発掘されたかながわの顔）特別講演資料
(57) 石川日出志他　二〇〇三「カラー口絵　顔面付土器・土偶形容器」『考古資料大観』第一巻、弥生・古墳時代　土器Ⅰ、小学館
(58) 川口徳治朗　二〇〇五「一七　人面付土器（後期）」『特別展　重要文化財 ―かながわ考古展―』神奈川県立歴史博物館
(59) 市原市教育委員会　二〇〇七「埋文ミュージアム第一話 三島台遺跡の人面付土器 秘められた弥生人の想い」『発掘いちはらの遺跡』創刊号
(60) 河合英夫　二〇〇八「蛭畑遺跡の発掘調査 ― 弥生時代の遺構・遺物を中心に―」『市史研究　横須賀』第七号、横須賀市
(61) 常陸大宮市歴史民俗資料館　二〇〇九『企画展　再葬墓と人面付土器のふしぎ』
(62) 横山太郎　二〇〇九「〇七一六　蛭畑（ひるばたけ）遺跡」『三浦半島考古学事典』横須賀考古学会
(63) 中村　勉　二〇一〇「六四　蛭畑（ひるばた）遺跡」『新横須賀市史』別編（考古）、横須賀市
(64) 設楽博己　二〇一一「三章　男と女の弥生人」『列島の考古学　弥生時代』河出書房新社
(65) 石川日出志　二〇一一「再葬墓の終焉と祭祀」『二〇一一年度栃木大会研究発表資料集（シンポジウムⅡ　考古学からみた葬送と祭祀）』日本考古学協会二〇一一年度栃木大会実行委員会
(66) 神奈川県教育委員会　二〇一一「コラム　顔」『弥生時代のかながわ ―移住者たちのムラと社会の変化―』平成二三年度かながわの遺跡展・巡回展図録